



モレネ

小さな隣国の勃興

Philip DRÖGE

ブランカ・ヴァン・ハッセルト

産出量が豊富な亜鉛鉱山がモレネと言うところにあった。モレネはその面積が270ヘクタールと小さいが、1816年から1920年の約100年間にわたって二か国によって共同統治された。

その亜鉛鉱山を発展させたのは、エンジニアで発明家のジャン-ジャック・ドニーである。彼はナポレオンのために亜鉛製の湯沸し装置付き携帯用バスタブを発明した。亜鉛は鉄や鋼よりずっと軽い。寒さに弱いナポレオンは、この浴槽をモスクワの軍事遠征にさえて持って行き愛用したと言う。

ジャン-ジャック・ドニーは、リエージュ（現在ベルギー、当時はナポレオン領）出身である。リエージュの少し西ケルミス（フランス語ではカラマイン）では、ローマ時代から亜鉛が採掘されていたのだが、彼は新しい技術を駆使して還元炉を開発し、亜鉛鉱石を効率良く大量に精錬できるようにした。ケルミス、カラマインの地名はどちらもラテン語のcalaminaris(亜鉛)に由来する。今でも亜鉛鉱泉(zinc spar)のことをlapis(鉱石) calaminarisと呼ぶのはその名残である。

1815年、ワーテルローの戦いで敗れたナポレオンがセントヘレナ島に流された後、ヨーロッパ各国はウィーンで会合を開き、戦後どのように国境線を引き直すかを話し合った。結果、長年のライバルであるフランスとドイツの間に緩衝地帯を設け、オランダを南へと拡大して今のベルギーを含むことが決定された。しかし、東側の国境をマース市にするのかライン川にするのかで議論は紛糾した。勿論オランダもドイツも莫大な利益を生む亜鉛鉱山が欲しい。議論の末に、亜鉛鉱山の有るモレネとケルミスの町はオランダとドイツ両国がとりあえず一時的に共同統治することになった。この体制はモレネの住民にとって長い苦難の始まりとなった。中立であるため、オランダの法律もドイツの法律も適用されない。そこでモレネでは「ナポレオン法典」が使われることになった。通貨はギルダーでもマルクでもなく、フランスのフラン。モレネの住民は国籍も無ければ投票権もなかった。しかし一方で、税金は無かったし、兵役も免除された。

そのような特殊な状況が、特殊な人々を惹き付けた。酒造りをするために遠くからやってきた輩が、税金無しでブランディーやリカーを作り領土外に密輸出した。また、西ヨーロッパ全土から犯罪者や泥棒がやって来た。たった2、3千人の住民しかいないのに、数十のキャバレーができ、ショーやギャンブルに町は沸いた。税金が無い代わりに福祉もない。しかし鉱山会社が、学校を建てたり、インフラも整えたり、ほとんどの必要なものを賄ってくれた。

1830年、オランダの南部マーストリヒトで暴動が起き、それをきっかけにベルギーはオランダから独立することになった。そこでマーストリヒトの南に位置するモレネは、ドイツ・オランダ共同統治からベルギー・ドイツの共同統治となったのである。モレネの北端フェールセルベルフは、ベルギー、オランダ、ドイツ、中立モレネの4か国の国境が接するポイントになった。

モレネは、オランダ人、ベルギー人、ドイツ人、そして元々の住人の子孫である無国籍の人々の寄り合い所帯であったが、時間の経過に伴って、住人たちはモレネ人としての自覚を持つようになった。1860年代ヨーロッパで切手収集が流

行する中、ウイヘルム・モリー博士がモレネの切手をデザインした。こうしたモレネの独自性を示すことは、ベルギーにもドイツにも喜ばれず、切手は廃止された。僅かに残った切手は大変価値のあるものとなった。

ギャンブルは時代と場所を選ばず、色々な種類が存在する。キャバレーの裏部屋でするカードゲームから、競馬の様に大規模に組織化されたものまで様々である。貴族が温泉に湯治に行くと、退屈しのぎに社交クラブを作ってギャンブルがしたくなる、こうして世界で初めてのカジノはモレネの南西30キロのところの温泉地にできた。続いてドイツのバーデン、モナコがそれに倣った。歴史が進むにつれて、ヨーロッパの王制は近代民主制へと変わり、それに伴って法律も変わり、賭け事は規制されるようになったが、モレネでは、ナポレオンの死後数十年も経つのにまだナポレオン法典を施行している。軍隊も時代遅れのままで役に立つものではない。抜け目のない企業家がモレネに来てカジノを作り、ドイツのザクセンアンハルトやベルギー、オランダの大都市、更にはロンドンから上流階級の顧客を集めた。ベルギー、ドイツ両国は彼らの領土内のこのような状態を苦々しく思った。この無法地帯についての永久的抜本的解決を求めて交渉が続けたが、どちらもこの鉱山リゾートを失いたくはなかった。何度も交渉をしては決裂し、条約がサインされない状態が続いた。

19世紀から20世紀に変わる10年間の間に、理想主義者たちは、ヨーロッパ中の多種多様な言語が相互理解を阻んでいると考え、共通言語を作ろうとした。その中でたった一つ現在まで生き残ったのがエスペラント語である。しかしいくら共通語を作っても、多くの人々が実際に使わない限り役に立たない。もしある国がその言語を公用語として定めたら、まず国内の人々に浸透し、他国もその動きに追随するだろう。そうすれば個人レベルでも国レベルでも、より良い意思疎通ができ、より理解し合える。7か国語が堪能で、フランス語の教師であり、フリーメイソンでもあるガスタブ・ロイは、エスペラント語を公用語とする国を探していた。彼はドイツのザクセンアンハルトでウイヘルム・モリー博士と会い、モレネでエスペラント語を公用語にするべきだと説得した。2、3年のうちにモレネの人口の3、4%にあたる140人の住民がエスペラント語をマスターした。エスペラント語の国歌も作った。しかしベルリン政府はこの動きを喜ばず、対抗処置として電気と電話線を切り、兵隊をモレネとドイツの境に配備し、モレネ住民の生活は苦しくなった。更に、まもなく第一次世界大戦が勃発し、ドイツ軍がベルギーに侵攻するため、モレネに侵入しフランスとの国境まで迫った。ドイツ側の敗戦後、ベルサイユ条約によりモレネはベルギーの領土となり、1920年1月10日中立モレネは消滅した。

モレネの歴史を観ると、政治の停滞によってどんなことが起きるかよくわかる。たった270ヘクタールの小さい領土であるが、還元炉による亜鉛精錬、独自の切手発行とその希少性、ヨーロッパで初めてのカジノ、またエスペラント語公用語化など、様々なことが起こり、周囲に旋風を巻き起こしたのである。

訳: 神村伸子 (Nobuko Kamimura)